

住生活学の課題

— 住環境と人間性に関する研究 その5 —

The Subject in the Theory of Habitation

— The Study of the Living Environment and Humanity (part 5) —

樋口 眞基子*

Makiko Higuchi

1. はじめに

環境問題は環境破壊、省エネ、省資源、エコロジー、自然保護、再生等の言葉が日常生活の中でなじみ深い言葉として使われるようになった。1970年代では公害問題が環境破壊という一部の地域で起こっている特別なこととしての環境問題であった。最近では、地球温暖化・ガス抑制に関する国際会議での先進国と開発途上国の状況の違いがますます大きな対立点となっている場面がテレビや新聞で報じられ、環境問題が世界共通な課題であるという認識を国民は持つようになってきた。しかし、家の庭先で起こっている事件でないから自分に直接関係している切迫した問題であるという危機感はない。

世界各地の異常気象、熱帯雨林における動植物の種の減少のような生態系の破壊を人間と自然との関係の改善の環境倫理の課題として、ゴミ焼却炉から排出されたダイオキシン、環境ホルモン、排気ガス等の人体に及ぼす影響は家庭や個人と、社会との関係の改善、利潤追求型マネジメントの見直し、企業倫理の課題へと発展し、何れも関係の倫理問題としてとらえることができる。

それではどのような関係を維持していこうとしているのか。もしくは関係を維持し持続して

いくことを可能ならしめるのには一体どのような関係を意識したらよいのだろうか。もちろん関係は良好で相互が健全であることが望ましいと誰もが願うところであるが、このような関係性が芽ばえず、育たず、なかなか成り立たない。その原因はどこにあるのだろうか。

現在、地域から地球規模にいたるさまざまな環境問題の状態は「関係性」の公正の欠如と「関係性」の希薄化・断絶であるといわれる。この原因がどこにあるかこれを探るにはヒューマンスケールではかることによって、生活的な諸側面がみえてくるはずだ。人間の身体性が正常に機能してこそ、正常な精神性が宿り、豊かな人間性が育つ。身体性は2本の足で歩き、考えることによって循環作用が始まる。生活の中で「歩く」という身体性を退化させることになれば、人間性の活源はますます枯渇して生気を失ってしまうことになりかねない。

今、現代の都市問題、環境問題を生活の中で「歩く」ヒューマンスケールで把え直してみる必要がある。

2. 課題と方法

そこで住生活学の授業を通して生活という日常性の中で地球環境を持続可能ならしめること

* 住居学科

を考察することによって「何を意識して、日々たゆまなく歩む」という点を確実に根づかせることができるか、その目的と方法を整理するものである。

今回は以下の3点についてまとめている。

- 1) 地域を歩くことで景観をみ、住環境と人間性を考える
- 2) 車社会の現状を把握、車社会と生活の質について考える
- 3) アメリカでの人間性に根ざした町づくりの運動の基本的な考え方を学ぶ

3. 住環境と意識改革 —教育の視点—

産業構造の変革や国民の意識改革の必要性は常に叫ばれてきてはいるが、地球環境の状態のすぐれないことに無関心ではおれないという緊急性の中で経済優先のシステムを改めることが必要だという認識が最近強くなってきている。これまでの経済成長が次世代を幸福につなげる、という幻想を捨て地球に持続可能な発展をもたらすためにはどのようなマネジメントがよいかを考える方向へと変わってきている。

「人へ、社会へ、地球へ」「暮らしを守るように地球を守りたい」これは企業広告である。地球環境問題が経済問題と無縁でないことを示している。

社会システムをつくり変えるということは意識・価値観の転換をはかるということであるが、これを誘導する力は経済に優るものはない。本来、教育が意識や価値観を人類の向かうべき理想に照準をあわせて動くのであろうが日本の場合この力が弱い。経済力に負けているのが現状である。つまり利潤追求のために手段を選ばないことに重点をおき、他への影響力を考えるとこの点について些も配慮する意識を育くませる教育効果は期待されていない。

国連人間環境会議の勧告を受けた環境教育政府会議の準備で環境教育の目的が「環境問題に関心を持ち、現在および将来においてもその解決に参加する人々を育てること」とうたわれて

いる。この主旨は何か、つまり関係性の中で、自己以外の存在の有意性に気づかされ、必然的に自己への気づきを促し、自己像の形成と確立に役立つという本来の教育の目的に近づいていくんだという意味がこめられている。

次世紀にめざす社会は「調和・共生・存続」という3つの原理が内包されることだといわれ、ユネスコによる1994年の国際教育宣言では普遍的な教育課題である「平和・人権・民主主義教育」に「持続可能な開発」と「寛容さ」の2つを付け加えている。今、社会のテーマ性において「持続可能な」という地球レベルでの取り組みが要求されている。

人びとの生活様式・生産と消費および廃棄の技術サイクル・生活環境の整備と自然環境との共生などを、風土に根ざしつつ現代という英知を極めることで自分の生活を価値あるものとして高めていくといったライフスタイルに見直して、循環型の地球社会を確立することこそが、総合的で健全な地球へ向かう。このように科学という知に社会システムの転換は負うところが大きい。知を操作する知の主体性にはやはり人間性が反映されている。この真実は必ず「豊かな」という言葉で形容される社会背景に「人間のあり方」が重要であるという含みがある。その点が最終的に問われてくる。したがって人間をどのように育てるかは、各分野での知を開発することに終止するのではなく、人間性が豊かだといわれる特徴としての個人の主体性と創造性を基にして関係の中に生きてきて、生きていて、生きていくという利他実現の「関係性の中に生きること」へと結んでいくことである。そうしてこそ精神のグローバル化が完全となり、教育の目的は達成される。

社会に貢献する関係性の1つである経済システムが能動的で健全な状態をめざし機能するという認識を教育の現場で確認しながらも、まず教育がそのように人間性を蘇生させ、関係づけるものであるということを忘れてはならない。

現代この教育の場が学校機関という限られた人工的(狭い・浅い・薄い)な環境に追いやら

れ、個人の成長が世代にとどまり、世代間の希薄さやコミュニティという人間関係の領域とその結びつきの弱さが露呈している。自然が人工化された都市化、自然との不自然な関係、車社会による生活様式のかたより、空間認知の未発達や交友関係の貧しさ等々、大人社会のコミュニティが破壊している以上に、子どもたちにとっての環境は豊かな人間性が育つための関係性を結びあえるような場として安全で安心した環境でなくなっていることが問題である。

3-1 住宅景観と人間性

1) 住宅地風景

山手線の内側からその周辺を歩いて JR の駅に向かう間の住宅地風景は決して美しい街並みではない。駅前商店街はゴミゴミとしていて商業施設としての建物が色、型、看板、ネオン、照明等で滅茶苦茶につくられているようにみえる。一方でこのような無秩序で雑然として猥雑で活気あふれていることが東洋的とさえいわれる。こんな印象をもたせる不思議な町が山手線の駅前商店街をつくっている。その間の細い小路を歩いていくと工場や倉庫が間を埋めている。生活圏のスーパーマーケットの間を抜けて行くと、乱雑極まりない住宅とブロック塀の連続である。ミニ開発と称する矮小住宅が世間の持家志向にのっかり、道路ギリギリに狭小敷地いっばいに法を犯してまで建設している様は決して美しくない。立止まって庭先に咲きほこる花を眺めようものなら家の中をのぞきこむようで気がひける。舗装され遊歩道として整備された道ではあるが、どうしてもただ歩くしかない殺風景な思いは何故起こるのであろうか。たとえば敷地としては利用できない所に児童公園を法律で要求されるからつくるようなものであって、結局だれも来ない、人気がないという道・公園のつくられている場合が多い。いわゆる効率主義と工事のやりやすさを優先して職業間の専門性にとどまっているからである。たとえば宅地造成して、宅地割をしてできた結果の宅地は家を建てるには不都合な形状となる。このように

都市計画的な見方で住宅地を考えると、生活者の目（そこを使う人）・家をつくる人の目から土地を見るという違いからおきているといえる。

現代の日本の住宅地の風景といい、そのものは近代合理化の名の下に短期間に、しかも工事費の低い、合わせのバラック群であっておよそ風景をつくるとはいえない代物ばかりだと思われる。これは、住宅の整備を個々の産業や零細な地域の住宅産業、デベロッパー、そして住み手に決定権が任せられているからである。宅地化にしても農地はみるみるまに宅地となり、都市周辺は非計画的・自然発生的な郊外住宅地が延々と農地を侵食していくことになる。そして、取得された土地に、個々の住み手の思いの要求で建物が建設され、施主の「我が家よければすべてよし」という要求に忠実な施工者と、住宅部品メーカーの各者間の利益だけを追求するのに支障がないことがベストな仕事であり、全体像のイメージの欠落など問題にならない。又かつての日本の集落や地域の普請においては、その土地の人々がその土地に家を建てていたので比較的その土地・周辺に対する意識が働いていた。それが現在では、日本の住宅産業というのは土地に対する責任性なるものを持たなくなったように思われる。というのはその土地の性質・自然環境・社会環境に適した建築を建てなければならないかどうかということにはなっていないで、個人の都合だけで土地とも住民とも関係なしに家が建っている。こんな家の建て方は地縁の結びつき（コミュニティ）を決して強くするものでもなく、やがてこれが日本の住宅の風景にもなっていく。

こうして建てられた住宅は、一戸一戸住み手の要求にかなったかどうかは別としても、あらゆるメーカーの部材と部品の満艦飾となっており、隣家の日照を無視せざるを得ない狭小敷地に法を犯していっばいに建て、道路にギリギリ、味気ないブロック塀を連ね、狭い道にも道いっばいに走っていく車、表通りはむろん車の多さと排気ガスで人通りも特定時間を

除けば少なく、ましてや子供や老人など危なくて歩く姿が見られなくなっている。ますます幼児や学童は住宅に、個室に閉じこもりがちになるのもいたしかたがない。近隣関係の行き来も少なくなる。そんな中に、集合住宅が建ち、匿名的生活志向居住者群が地域の中に乱入してくる。これは都市化という価値の表われであるが今となればコミュニティーや住環境破壊につながる。

「家」住宅である建物には魂が宿るというように、住宅はそこに住む人が地域の発展を願うことでその土地からの恩恵を受けるというその循環性の自然の働きは、今も昔もその性質において変わるものではない。つまり、古い街の隣近所に対する細やかなお互いへの配慮なる思いやりで維持されているからである。たとえば裏の家に影を落とさぬように二階の位置を決める。下着などは見えないようにタオルで隠して干す。他所さまの家の前に不細工な物置などつぐらない。ゴミの日には清掃車が来るとサッとをゴミ置き場のある家の前の道を洗って掃いておく。隣の家を見下ろす窓はくもりガラスにしてなるべく開けない、夜はオーディオをならさないし、クーラーは11時以後は切る等々。生活の中でのこうした古い（古くからの）社会性に裏づけられて建物も隣とかけ離れたものにせず、極端に走ることを避け、和していこうとする精神でちょっとした工夫をして個性を表現していた街。今こうした心づかいというものを生活全体で失くなっている。生活者として一つの土地を共有している自覚から来るこういう気働きを全くなり、固体的知に支配されている。本来居住地が養う社会性が育たないために警察の公安係には多数の苦情が申し立てられている。昔なら住戸内にあっては家族員の気配や音を障子越、ふすま越に察知し、住戸外ではお互いに注意合せてそれですんだことが今は警察や役所が介入しないと解決しない社会になってしまっている。本当にこのような近隣関係が望ましいのだろうか。一般に住まいに求められる環境の良しあしは「静けさ」が第一に優先され、次に「教

育と安全の場」であり「ご近所の楽しいつき合い」である。

欧米とわが国の住意識調査報告（雨宮1993）によれば、デュッセルドルフに在住している日本人と、東京に在住しているドイツ人の住環境についての意識は当然といっておかしいが、西ドイツの方が良いと感じており、その理由として、「緑が多い」「街が美しい」と周辺環境を評価している割合が圧倒的に高い。そこでそれぞれ在住先での生活についてその便利さと理由については日本の方が「店の営業時間が長い」「商品サービスの種類が多い」という物質面での便利さの評価が高いのに比して、「近所同士助け合っている」という内容に対してドイツが高いのは外国で日本人同士が集まりやすいこととは若干違ふであろうと思うが、ドイツの環境の方が助け合うという行為が成り立ちやすいということであろう。雨宮氏は西ドイツの環境や社会資本に対する評価の高さに両国の住環境の水準が認識できるという。

2) 社会資本的住居

住居は個々の家族が持ち、生活する私的な財であり個人の所有財産であるが、その住居が集まれば全体は社会的存在である。個々の住宅が劣悪醜悪であれば地域・街も醜悪になる。住宅構造はもちろん住宅の建て方・外観デザインがまちまちであるのもそれはそこに住みつづける居住者にとって、「居は気を移し、養は体を移す、大なるかな居や」（住居の状態は精神を左右する、食物はからだを左右する、住居の力は偉大だ）と孟子の言葉である。現代人にとっての日々の暮らしのなかで（住戸内から住戸外）充足感を感じるのは寝食が満たされた上で、自己の才能の発揮、音楽、絵画、彫刻等の芸術に触れること、家族や親しい友人との語り、動植物とのたわむれなど、人さまざまであるが安心してぐっすり休める寝室、心安らぐ住宅、窓からさし込む陽光、心地よい風、気分が晴れ晴れし壮快になる居住地、行きかう人の表情、子どもが思い切り遊びまわられる庭・広場など住環境は決して一戸の住宅だけで完全ではなくそれ

らが集まって建って構成する住居こそその地域の気をつくっている。この気を受けて人間は育つ。住環境が人間性の発達に多大なる影響を与えることはもちろん豊饒が求められる社会形成にも関係してくる。

住宅構造が劣悪で、過密で町が汚なく車による騒音や排気ガスなどの空気汚染や危険に曝され、緑や水といった自然も貧しいといった住環境のもとでは個人が人間性ゆたかに、人権意識に満ちた存在となりえるだろうか。個人・家族・社会の健康・安らぎ・平和・安全の得られる居住環境こそ市民社会の基本である。

3-2 車社会の現状と生活の質

1) 車社会と生活様式

日本において車社会が本格的に進行したのは高度経済成長が始まった1960年代からであり、マイカーが急増し始めた1966年がマイカー元年、その後短期間に保有台数が驚異的な増加を見た。その背景には自動車関連産業を経済成長のテコとする戦略産業として優遇した政府の政策もあったけれどもアメリカ型生活様式をあこがれの目標としてマイカーをその象徴とみなす国民的な気分があった。

確かに、自動車による交通手段は都市構造（職住分離などの郊外化、自動車優先の道路構造、自動車型生活施設など）や生活様式（買物、レジャー、交際その他）にも変容をもたらしてきた。その結果、マイカーなしには生活できない町、マイカーなしには成り立たない生活様式、「とにかく車がなくては」という生活意識を作り出してきた。

地域の生活圏をみると、郊外に大規模な駐車場を備えたショッピングセンターやディスカウントショップ、ファミリーレストラン等が出店して小売り店である商店街を衰退させる。週末には家族連れでレジャーを兼ねてまとめ買をする。家庭には大型冷蔵庫を備え、共働きが可能となる。そして、一軒に2台以上のクルマが必要となるといった結果、商店も駐車場の確保できる広い郊外へと移転せざるをえなくなる。こ

うして地方都市においては、地域の一番盛える店は郊外にある。クルマを持たないとそれらの便利から疎外されるため、クルマ保有への圧力がいっそう高まる。こうして車の必需品化が生活様式に浸透してきた。

一方で、クルマの害悪は、地球環境問題や高齢者の交通事故の多発という交通戦争や排気ガスの公害など深刻な社会問題を起こし、また交通渋滞や駐車場難など都市の交通機能もマヒさせている。個人の健康面でも歩くことが減り、体力の衰退も見逃せない。

2) 車社会と生活の質

車の害悪と利便性について語るとき、両方の議論はなかなか噛み合わない。しかし生活の質が問われてくると、脱車社会は高度なもっとぜいたくな生活を追求することになる。近代化の過程で追い求めてきた「豊かな」生活様式が環境問題などで真剣に考え直さなければならないような立往生的な行き詰まりにある。そこで、「生活の質」について改めて問い直すならば、① 生活の豊かさを利便性だけでなく、どんな生きものにも命があり、その命を生かすという生命的な視点を見失わないこと、② 成人の健全者中心の価値観から高齢者のような終末期にはいる多種多様な年齢層の特長的な弱点を補完するような環境を考えること、③ 車を運転する人は自分の一生を考えれば子供時代、高齢者時代が必ずあるわけで、その期間クルマの絶大な被害者であるとしたらばどう思うか。そういった自分の立場を逆点して持たない者の立場にたてること、④ 車は個人の利便性の追求によって豊かな生活を獲得できると信じこむ一つの手段であるが、個人の利益が、集団（地域・社会）の豊かさに必ずしもつながるとはかぎらない。例えば阪神大震災の教訓のように車では人も助けられない。コミュニティーの協同的な縁と援助という思いやりなしには個人の豊かさもありえないということ、⑤ 交通戦争によって一瞬に命をおとすような危険性もはらんでいの中で生活圏にあっては安全・安心の重視でなければ豊かさといえるかということ。

3-3 今アメリカの町づくり

アメリカは広大な国土のなかで、自然を人間に従属させ、常に豊かで質の高い生活を求めてそれもビッグなサイズがあたりまえのような日常性が都市を形成してきた。価値観や宗教の違う多種多様な民族が自由と民主主義を共通の帰属する精神としてコミュニティをつくってきた。そのアメリカで今、物質文明が進展するなかで、民主主義の礎であるコミュニティが失われつつあるという危機感と反省にたって、資源の有限性や地球環境の維持という地球規模の壁に気づき始めた。

そこで、今アメリカでは人間性に根ざした半永久的に存続しうるような町づくりの運動が起こっている。人に優しく人とのふれあいのある人間性豊かな生活の場を提供し、コミュニティを取り戻すこと。現代技術を生かし伝統に根ざしたローカル技術も利用して、エネルギーの効率化を図ること。資源の無駄使いをしないこと。生活に必要なものが身近で揃えられ、車を使わないで用がたせるようなコンパクトな町をつくらうとしている。つまりヒューマンスケール(人間のサイズ、歩行の早さ)を取り戻そうとしている。ガソリンをはじめとする化石燃料の消費を抑制し、地域のエネルギー需給バランスも考慮に入れた町づくりが必要と考え直している。このような問題意識に目覚めた視点で近年のアメリカの町づくりに疑問を提示し基本的な考え方を新しい町づくりに生かした。その原則とはアワニー原則といわれるものである。(川村1995)

日本は戦後アメリカ型生活様式をあこがれの目標としてきた。やはり近年になってアメリカで、サスティナブル・コミュニティという考え方が建築家の動きによって広まってきた。二つの理念「強いコミュニティの創造」と「サスティナビリティの追求」、又7つの要素「アイデンティティ」「自然との共生」「自動車の利用を削減する交通システム」「ミックストユース」「オープンスペース」「画一的でなくいろいろな意味で工夫された個性的なハウジング」

「省エネ・省資源」を拾い出した。この成果が日本に波及し、今、また自ずと取り込もうとする動きが活発になってきている。

4. まとめ

日本の今様ライフスタイルは戦後、欧米先進国のスタイルを取り入れながら非常に大きな変容を遂げた生活様式である。物質的な豊かさといわれる消費生活、延命処置、娯楽施設の氾濫、市民的「自由」を相当程度まで享受することができるに至った。その変化の背景には近代化、都市化、アメリカナイズ、大量消費、中流、サラリーマン、という価値的評価の高い言葉で表わされているということである。

しかしながら、高度成長以後「経済大国」にはなってみたものの低成長の現在では豊かさの実感は乏しい。かえって住環境を構成する人的環境(地縁関係)も自然環境(生態系の破壊)も社会環境(犯罪・汚染)も悪しき一途を辿っている。つまり地球規模の環境問題の深刻化、超高齢化社会の到来、生活保障の後退、犯罪の横行、いずれも課題の規模は大きい。

人は環境の良悪しの状態を心得ていて、こうすればどうなる、だからこうしようという知恵が本来動物的本能として備わっているのであるが、貪欲という欲に惑わされて翻弄されているのが現実だ。その欲に対して今個人レベルから地球レベルまで警鐘が鳴らされ喚呼されている。

人は良心を持っている。その良心が働くことを前提に環境は整備されていることが望ましい。たとえ動機は不純であっても、人は良心に立ち返らざるをえない特性があるから。だから人が行動を起こす際に、選択肢が多種多様取り揃えられている状況が豊かな社会であるといえる。文化的社会とは量的に選択肢が多く、一つ一つの項目が洗練されている。そこに自由があり発展がある。

現代は色々ある選択肢の中から良心に従って何を選ぶかが問われているのである。つまり良心と葛藤する欲の折り合わせるところが「自分

のため」、「家庭のため」、「隣人・地域、社会のため」なのかという「何々のために」という部分をどれだけ意識しているかが問題であるが、あまりここに注目されてこれを修正したり改革するためのプログラム・システムは立案されず私事性におさまる。

いつも「物的豊かさは満たされているが、精神的豊かさは」というくだりが目に止まる。確かに豊かさと同様に、生活の質とは何かという問いかけもあるが、この問いかけもいつもめぐりめぐってくる問いかけである。何故ならば、人類が、人間の特性としてもつ向上心による上昇していこうとする本性を生まれながらに本能として宿しているからだ。だからこそどの階層での生活の質について対象にしているのか、価値付けているのかという認識と自覚があるかどうか、その区別をしながら問題に取り組むことが第1の課題である。

こうすれば、何が問われてくるか、「意識をもつ」「意識する質の段階はどのレベルか」これを保護し、擁護し喚起するのが関係性という関係にある。たとえばコミュニティー。何を意識しているかという目的意識をもって自分の存在を確かめ、家庭人として家庭を営み、組織で威力を発揮し、地域社会でボランティアに参加するといった具合に、相互の意識の正常性を確認しあう安全に機能するコミュニティーが必要である。自覚的・自律的かつ主体的な営みとして生活が成り立つような環境をめざす。そこに今気づき始めているのではないだろうか。

現代の諸問題は先述したように、今世紀の近代化・都市化の流れの残骸としての諸相である。その中で見過してきたことや、切り捨てられたことを拾い出し、「調和・共生・存続」のための種子を探し出し、それをどのように植え育てたらよいか意識することが第2の課題である。

5. おわりに

意識をもたせ生活様式をどのように変えさせるか、どこまで住教育の中ではたらきかけ、知

識としてたたきこむことができるだろうか。色々な課題を通して、作品を制作する時に、自分の周辺をよく歩かせ、観察し、感じてから、さてこれをどのように現代の材料を使って現代の問題を解決するために作品として表現するかというプロセスの中で創造するという主体性が養われる。この創造的主体性こそ個人としての生活者として訓練され身につけることが大事ではないだろうか。

この結果、社会人として生活圏を計画する際には環境（人・自然・社会）からの発信と情報を受けとめながら、第一に、そこで生活する人びとが生活様式の変革と向かいあえる地域のあり方の構成や施設システム等および土地を利用する際、全体計画の中で常に鳥瞰視しながら組織化するという主体的な役割に気づき、第二にそれらをそこに住む人と地域にとって意味のあるものとして表現すること—限りなく美しい形態として造形デザインするというはたらき手となること。

また、すでにある都市や農村をそれ自体歴史的文化的存在であることを認め、この伝統を継承していきたいという強い過去（土地・氏・先祖）への憧憬がその地域の独自のものとして新しい景観をデザインする要となる。

このように地域における風景が作り出されてくると、自分たちの町に愛着と誇りを持ち、町に社会性が生まれ自ずとコミュニティーが成立してくる。

特に強調して教育の中で涵養されなければならないことは、消費者としての個別に多々ある選択肢の中から選ぶ受動的「自由」という行動ではなく、地域の共同体として、まちをつくっている構成員としての責任と良心の性質から起る能動的な「自由」を権利として守り育てていく姿勢である。

引用文献

- 1) 『住サイエンス』雨宮睦男 創樹社 1993年22号 p.p. 4～9

参考文献

- 1) 『サステイナブル・コミュニティ』川村健一他
学芸出版社 1995年
- 2) 『居住福祉』早川和男 岩波書店 1997年10月
- 3) 『いい家の本』宮脇 檀 PHP 研究所 1998年
7月
- 4) 『地域共生のまちづくり』三村浩史他 学芸出版
社 1998年8月
- 5) 『BIO-city No.10』1997年1月
- 6) 『BIO-city No.14』1998年7月
- 7) 『環境共生』環境共生住宅推進協議会 ビオシティ
1998年10月
- 8) 『福祉のまちづくりと交通資料集』ノーマライゼー
ション環境小委員会 日本建築学会 1997年3
月
- 9) 『公園, レクリエーション施設のバリアフリーデ
ザインとユニバーサルデザイン』資料集 ノー
マライゼーション環境小委員会, 日本建築学会
1997年7月
- 10) 『首都圏近郊の居住環境を考える～埼玉県を例と
して』環境小委員会 日本建築学会 1997年10
月